＜平成 29 年度研究発表会開催概要＞

日　時：平成 29 年 11 月 14 日（火）
場　所：ホテルアウィーナ大阪
発表校：大阪市立勝山中学校
テーマ：バスを降りると、そこは新たな自分に出会える大自然
　　～四国南阿波方面での「ほんもの」体験～

【重点を置いた活動】
　初めてのサーフィン体験や田舎の暮らしをとおして心豊かな人間性を育む

（実施要項）
・旅 行 先　徳島県南阿波、香川県高松方面
・時　　期　平成 29 年 5 月 23 日（火）～25 日（木）　2 泊 3 日
・実施学年　第 3 学年　生徒数　61 名　引率教員　8 名

・日程概要
　1 日目：学校（バス）⇒室津PA⇒鳴門IC⇒大浜海岸（昼食・入村式）⇒
　　南阿波各地区（対面式）⇒各民家【南阿波よくばり体験（農家・漁家体験）】
　　〈各民家泊〉
　2 日目：各民家⇒生見海岸・マリンジャム他【南阿波よくばり体験（マリン体験）】
　　⇒離村式⇒ホテル（入館式）　学年レクリエーション　〈ホテル泊〉
　3 日目：ホテル（退館式）⇒中野うどん学校（うどん作り体験）⇒室津PS⇒学校

バスを降りると、そこは新たな自分に出会える大自然

――四国南阿波方面での「ほんもの」体験――

大阪市立勝山中学校長　原口　貴美子

大阪市立　勝山中学校

●学校紹介

本校は、大阪市東部に位置する生野区に新制中学校の大阪市立生野第二中学校として、昭和22（1947）年に創立した。本校の校訓「考えよう　努力しよう　助けあおう」は、これからのグローバル社会を生き抜くために必要な姿勢を示している。答えのない課題に対しても自らしっかり「考える」、困難なことに対してもあきらめずに「努力する」、そして、自分と異なる意見を持っている人と「助けあって」新しい価値を創り出す。本校の生徒たちはこの校訓を守り、学習をはじめ、生徒会活動、部活動等に明るく元気に取り組んでいる。

さらに、地域から学ぶ多文化共生の取組や16年前に姉妹校提携を調印した中国上海市甘泉外国語中学との国際交流推進事業等の取組を継続、充実させている。地域社会に貢献できる人材育成、さらには、グローバル社会を生き抜く子どもの育成を使命として努めている。

校舎外観

School Data

【創立年】昭和22（1947）年
【教育目標】
一人一人の人権を尊重し、豊かな人間性を育み、『学び』が育つ集団育成を推進する。
① 基礎・基本の徹底を図るとともに授業の創造に努める。
② 自律的な生活習慣の育成に努め、互いの違いを認め、協力し合える集団を育てる。
③ 多様な教育活動を展開し、家庭・地域との連携を一層深める。
【生徒数】195名
【教職員数】25名

実施要項

●行き先　徳島県南阿波、香川県高松方面
●実施日　平成29年5月23日（火）～25日（木）　2泊3日
●実施学年　第3学年2学級　生徒数61名　引率教員数8名
●日程概要

1日目	5月23日（火）	学校（バス）→室津PA→鳴門IC→大浜海岸〔昼食・入村式〕→南阿波各地区〔対面式〕→各民家【南阿波よくばり体験（農家・漁家体験）】　＜各民家泊＞
2日目	5月24日（水）	各民家→生見海岸・マリンジャム他【南阿波よくばり体験（マリン体験）】（午前＆午後）→〔離村式〕→ホテル〔入館式〕（学年レクリエーション）　＜ホテル泊＞
3日目	5月25日（木）	ホテル〔退館式〕→中野うどん学校高松校（うどん作り体験）→室津PA→学校

1 修学旅行でめざすこと

「修学旅行」は、「学を修める旅行」と書く。生徒たちは、小学校、そして中学校での2年余りの間に、学校で多くのことを学び、仲間と共に助け合って困難なことにも取り組んできた。中学3年生は、その学びの集大成の時であり、「学を修める」つまり、「学んできたことをしっかりと身に付ける」時である。そのスタートとして「修学旅行」を位置付けている。日常とは異なる「修学旅行」での新たな出会い、ふれあい、発見をとおして喜びや感動を味わいながら、生徒自らが実践することにより確かめさせたいと思う。

本校は、今年度、これまでの教育を継承してめざす生徒像「絆を大切にし、自らの生き方を考え目標に向かって努力する生徒」を設定し、キーワードを「自律と共生」として取り組んでいる。修学旅行にむけて、生徒一人ひとりが自律的に活動し、集団としての思いやりある共生の精神を育成することを重点とした。

2 生徒全員が無理なく一緒に活動できる ―目的地選定―

昨年度、北九州方面を予定していた修学旅行が、熊本地震発生のため、変更を余儀なくされた。その年の生徒たちは、被災された人々に心を寄せて自分ができることは何かを考え、急な変更であっても精一杯の準備と活動により心に残る修学旅行を作り上げていた。天災の脅威を再認識するとともに、安全・安心な修学旅行の実施に全力を尽くさなければならないと思っている。

今年度、本校には、初めて取り組む校外学習において移動の交通手段等で配慮を要する生徒がいる。そのことを考慮して、バスを使って移動距離も無理のない計画を旅行業者から提案していただいた。その結果、大阪から3～4時間で到着できる所、学校集合で皆と一緒に行くことができる、四国南阿波方面に決定した。移動のバス内も生徒の仲間づくりをめざしたレクリエーションで盛り上がり、配慮を要する生徒も皆と一緒に楽しむことができた。

●重点を置いた活動

初めてのサーフィン体験や田舎の暮らしをとおして心豊かな人間性を育む。

3 生徒自らが作り上げる修学旅行に ―事前学習―

修学旅行の目的として次の二つを設定した。①美しい自然に恵まれた環境の中で、都会ではできないマリン体験学習や農家・漁家民泊をとおして自然に親しむと共に、地元の人たちとの交流を深め、豊かな心と人間性を育む。②班活動や学級活動をとおして、集団の中で個人の役割や責任を果たし、ルール・マナーを守る姿勢を身につけ、今後の集団づくりに活かしていく。

中学校に入って初めての宿泊行事である1年「一泊移住」では、カヌーやカヤック体験も含めた、規律ある集団生活をとおして新しい仲間づくりに取り組んだ。そして、いよいよ2年生の3学期から、修学旅行実行委員を決めて、生徒自身が主体的に取り組む修学旅行の準備を行っていった。

3年生になると、役割分担だけでなく、班ごとにタブレット端末パソコンを使って調べ学習を行った。「南阿波よくばり体験」について、徳島県の農業や水産業、観光名所・特産物・お土産、香川県のうどん作り等を調べ、修学旅行のしおり『番外編』としてまとめた。さらに、レクリエーション大会の企画や準備にも力が入っていた。

4 「初めて」の体験から新たな自分を見つける

(1) 壮観な大浜海岸での昼食

ザバーン、ザバーンと寄せては返す波の音

波の音をバックに記念撮影　―大浜海岸―

に、生徒たちの歓声がかき消されていた。修学旅行の最初の訪問地は、ウミガメの産卵地で有名な大浜海岸である。全員、海と対峙するかのように浜辺に座って昼食をとった。美しい白砂に、生き物のように押し寄せる波に圧倒されてしまったようだ。そして、この美しい海岸で南阿波の入村式を行い、民泊の各地区に分かれて出発していった。

(2)「ミッション」を果たした民泊体験

民泊体験では、都会ではなかなか味わうことができない暮らしをありのまま体験した。民泊先の方々から家族同様に優しくしていただき、生徒たちはすばらしい思い出をたくさん作ることができた。

漁家では、人生初の釣り、そして釣った魚を刺身やフライにしたり、かつおのたたきを自分で作ったりしていただき、とてもおいしかったこと。また、岩場から釣りをすると思っていた生徒は、「何言うちょんねん、釣りは船に乗って海まで行ってするに決まっちょるやろ。」と民家の方から言われ、船釣りを体験できたことに興奮していた。

農家では、じゃがいも掘り、さといも植え、大根抜きなどの農作業に取り組んだ。にんにくの収穫のお手伝いをして、「農家の方の役に立てたので良かったです！」と貢献できた喜びを語っていた。さらに、「自分たちで薪や木々を拾い、薪で米を炊いてご飯をつくったり風呂を焚いたりという、必要最低限のことはできるようになろうと言われているような体験をして、勉強になった。」と活動の意味づけをしている生徒もいた。

初めての船釣りで大漁　（民泊体験）

教わりながら農作業のお手伝い　（民泊体験）

これらの民泊の活動を支えていたのが、修学旅行実行委員が、農家・漁家の方との交流を一層深めるために考えた、民泊での「ミッション」であった。お手伝いだけでなく、その村の良い所や昔話を聞き出したり、トランプやUNOで楽しく過ごしたりできるように工夫していた。

修学旅行　民泊

MISSION

□お手伝いせよ

□村の良い所３つ聞き出せ

□昔話を聞き出せ

□トランプorUNOをせよ

上記のうち３つクリアせよ。

全て、民泊の方々に協力してもらうこと。証明として、最後にサインを頂け。

(3) 全員がチャレンジしたサーフィン

各民家の方とお別れをして、２日目はマリン体験。そこは、サーフィンのメッカとなっている高知県東洋町（とうようちょう）の生見（いくみ）海岸、白浜海岸。こんなに大阪から近い所で、「ほんもの」体験のサーフィンに取り組めることに驚いた。ほとんどの生徒にとっては初めての体験であったが、インストラクターによる丁寧な指導により、生徒全員が自身の目標にチャレンジして達成をめざした。「初めてのウェットスーツは違和感がありました。」と言っていた生徒も、「最初は立つことすらできなかったのですが、波を感じるうちに波と友だちになれました。」と、次第に波に乗ることができ、倒れることなく最後まで立てた時の達成感を感じていた。ほとんどの生徒にとって、体験の中で一番印象に残ったのが、やはりサーフィンだったようだ。

続いて、徳島県海陽町の海洋自然博物館マリンジャムでは、シーカヤックとシュノーケリングのどちらかを選択し、専門的な指導のもと初心者でも安心してマリンスポーツを堪能することができた。

サーフィンに初挑戦　―白浜海岸―

(4) 学年が一つになれた レクリエーション大会

自然体験をいっぱい味わい、南阿波よくばり体験推進協議会の皆様と離村式でお別れをして、２日目の宿泊ホテルの「リビエラしくい」に到着した。

まずは、大浴場での入浴でさっぱりしてから、入館式、夕食を済ませ、いよいよ、待ちに待った学年レクリエーション大会です。実

行委員レク係は、どうすれば皆を楽しませることができるか、学年が一つになれるか、を考えて準備をしてきた。自分たちが考えた似顔絵リレーや、ジェスチャー・データクイズ等により、学年全員を楽しませて大成功だった。

そして、修学旅行中に誕生日を迎えた生徒に、旅行業者の添乗員さんにも協力していただき、皆からの祝福のセレモニーを行った。心温まる皆のサプライズに、お祝いされた生徒の顔に感激の涙があふれていた。学年集団の思いやりの心がそっと花開いた場面であった。

(5) 踊って作った本場の讃岐うどん

ホテルの退館式を終えて、本場讃岐の手打ちうどん作りを体験するため、香川県高松へと出発した。「中野うどん学校」では、用意された前掛けを着けて、各自持参している三角巾を頭に巻き、用意万端。陽気なプロ職人の指導のもと、粉を練るところから始まり、足で踏む。この時、流行の音楽に合わせて踊りながら踏んでいく。生徒たちは乗りに乗って踊っていたので、職人さんも思わず笑ってしまうほどであった。各自、麺棒でのばして切り、昼食としていただいた。多少太くなって不揃いの麺があっても、初めてうどんを一から作った生徒は、「おいしい。おいしい。」と言ってお腹いっぱい食べていた。

「皆で踊りながら踏むと、楽しい！」 ―中野うどん学校―

5 学びの集大成の第1章に ―事後学習―

この修学旅行が、生徒にとって学びの集大成の第1章になることを願い、ふり返りを行った。

「修学旅行を終えて」の生徒レポートには、「私は、修学旅行を通じて大切なことをたくさん学びました。1つ目は、学年の皆と協力することです。…2つ目は、何事にも挑戦することです。…3つ目は、人々との交流の大切さです。…」と記した生徒がいた。数々の初めての体験を楽しんだだけでなく、修学旅行の目的達成に全員で協力し、挑戦して達成した時の喜びや人とのふれあいの大切さを学んだようである。

6 まとめ

今回の修学旅行は、目的地選定から配慮を要する生徒を中心に据え、すべての生徒の自律性を育てるとともに、目標達成の喜びを味あわせるように努めた。そのため、三つの取組内容の重点化を行った。

一つ目は、田舎の暮らしを体験する「民泊体験」である。民家で家族の一員として作業を手伝ったり、祖父母の年代とのコミュニケーションをとったりして、人と人とのふれあいから学ぶ。その地域の人々の生き様や農山漁村の役割を理解し、自らの生き方を考える機会を得ることができた。

二つ目は、都会では味わうことができない大自然での「マリン体験」である。サーフィンに全員が取り組み、インストラクターの指導により一人ひとりに応じた目標にチャレンジして、新たな自分を発見することができた。

三つ目は、四国と言えば、本場の「讃岐うどん」ということで、「うどん作り体験」である。流行の音楽に体を乗せて、リズミカルに踊りながらうどん打ちをする。この活動は、本格的であり楽しくて仲間と大喜びした忘れられない思い出になった。

ふり返れば、出発式で、修学旅行実行委員がしおりの生徒心得として挙げている「目的を理解し、目標の達成に努める。」を全員に意識づけたことに始まった3日間であった。特に「時間を守る（10分前行動、5分前集合完了）。」を生徒たちが心がけたことにより、スケジュールよりも早めに進めることができ、実際にゆとりある行程となった。生徒一人一人がすべての活動に主体的に参加し、ほんものにチャレンジして新たな自分に出会うことができた修学旅行であった。

修学旅行をとおして、学年集団として成長を確かめることができたが、まだ、学びの集大成の第1章である。今後も、「自律と共生」をキーワードに、人間関係を大切にして、自らの将来を考えて目標を設定し、それに向かって努力を惜しまない生徒の育成をめざしていきたい。